

自発的、自治的な活動による自浄作用の働く学級集団の育成  
 ～学級経営における集団指導と個別指導の指導原理に基づいた指導・支援の工夫を通して～

宮崎市立本郷中学校  
 教諭 野口 貴史

目 次

<b>I 研究主題</b> .....	2 - 1
<b>II 主題設定の理由</b> .....	2 - 1
<b>III 研究目標</b> .....	2 - 1
<b>IV 研究仮説</b> .....	2 - 2
<b>V 研究内容</b> .....	2 - 2
<b>VI 研究計画</b> .....	2 - 3
<b>VII 研究構想</b> .....	2 - 4
<b>VIII 研究の実際</b> .....	2 - 5
<b>1 理論研究</b> .....	2 - 5
(1) 集団指導と個別指導の指導原理 .....	2 - 5
(2) 集団指導 .....	2 - 5
ア 学級集団の発達過程 .....	2 - 5
イ 2対6対2の法則 .....	2 - 6
ウ 特別活動の教育的意義 .....	2 - 6
(3) 個別指導 .....	2 - 7
ア 開発的生徒指導 .....	2 - 7
イ 自己有用感の醸成 .....	2 - 8
ウ マズローの欲求階層説 .....	2 - 8
エ 規範意識の醸成 .....	2 - 9
<b>2 意識調査</b> .....	2 - 10
(1) 学級集団意識調査（6月）の方法 .....	2 - 10
(2) 学級集団意識調査（6月）の考察 .....	2 - 11
<b>3 本研究における「自発的」、「自治的」、「自発的・自治的な活動」、「自浄作用」の定義付け</b> .....	2 - 11
<b>4 実践研究</b> .....	2 - 11
(1) ルールの中でのふれあい .....	2 - 11
ア グループアプローチに関する年間計画の作成 .....	2 - 11
イ 職場再建の三大原理の意識化 .....	2 - 12
ウ 学級内におけるルールづくり .....	2 - 12
(2) 生徒指導の三機能 .....	2 - 12
ア 学習の基本型の作成 .....	2 - 12
イ チェックリストの作成 .....	2 - 13
ウ 検証授業Ⅰの実施 .....	2 - 13
(3) 自己有用感の醸成 .....	2 - 15
ア コミュニケーションノートの活用 .....	2 - 15
イ グループノートの活用 .....	2 - 16
ウ 検証授業Ⅱの実施 .....	2 - 16
<b>5 実践後の意識調査</b> .....	2 - 19
(1) 学級集団意識調査（11月）の考察 .....	2 - 19
(2) 実践内容に対する意識調査（6月・12月）の考察 .....	2 - 19
<b>IX 研究の成果と今後の課題</b> .....	2 - 19
<b>1 研究の成果</b> .....	2 - 19
(1) 集団指導の視点から .....	2 - 19
(2) 個別指導の視点から .....	2 - 19
<b>2 今後の課題</b> .....	2 - 20
(1) 集団指導の視点から .....	2 - 20
(2) 個別指導の視点から .....	2 - 20
おわりに .....	2 - 20
参考・引用文献等 .....	2 - 20

## I 研究主題

自発的、自治的な活動による自浄作用の働く学級集団の育成

～学級経営における集団指導と個別指導の指導原理に基づいた指導・支援の工夫を通して～

## II 主題設定の理由

現在、社会の都市化、情報化、核家族化、少子高齢化の進展に伴い、子どもたちの社会性や協調性の希薄化、規範意識の低下といった社会生活を送る上での基本的な生活態度が失われつつあることが危惧されている。現在の子どもたちは、様々な人と関わる経験や機会が減っており、人間関係の形成や維持が難しくなっている。そのため、自分の思いが相手にうまく伝えられなかったり、相手の思いを聞き取ることができなかったりするなど、人間関係をめぐるトラブルを生じやすくなっている。変化の激しいこれからの社会において、子どもたちが周囲と協調しながら、心豊かにたくましく生き抜いていく力を学校教育、家庭教育、地域の教育力を通じて育成する必要性が一段と高まっている。

このような情勢の中、本県は第二次宮崎県教育振興基本計画を策定し、「未来を切り拓く 心豊かでたくましい 宮崎の人づくり」をスローガンに、次世代である子どもたちをはじめ、県民一人一人が宮崎や我が国、そして世界の未来を切り拓いていく人となるよう、社会全体で教育に取り組むことを目指している。また、平成22年に教員、保護者、一般者を対象に実施した本県教育の現状と課題（教職員への期待）のアンケートでは「教職員の資質や姿勢で特に大事だと思うこと」の項目に対し、「悪いことをしたときに、きちんと叱る」が教員、保護者、一般回答の上位を占めていることから、規範意識の醸成を図る教育への期待がうかがえる。

私が過去に受けもった学級の様子を振り返ってみると、学級開き間もない時期に学級のルールやマナーを軽視した自己中心的な言動や、億劫なことは人任せにする姿が見受けられ、このことを学級の問題点として再三取り上げてきた。これは、人間関係が希薄化した状態にあり、集団生活を営むために必要なルールやマナーを遵守するなどの規範意識が低いことや自己の価値観を優先する傾向が強いことが要因であると考えられる。したがって、「集団」の一員としての多様な「個」を育てながら、ルールやマナーを遵守した豊かな人間関係づくりを図るとともに、生徒が自ら学級における問題に気付き、仲間と協力しながら解決していくような自発的、自治的な活動が展開される学級集団に育てあげていくための手立てを講じることは、学級担任の使命であると考えられる。

そこで、理論研究では集団指導と個別指導の指導原理に基づき、集団指導に関して望ましい学級集団を目指した学級集団の発達過程、組織論の中の2対6対2の法則、特別活動の教育的意義についての研究を進めることとする。そして、個別指導に関して開発的生徒指導を推進していく上で必要な自己有用感の醸成、学級集団づくりに有効であると考えられるマズローの欲求階層説についての研究を進めていくこととする。また、豊かな人間関係づくりにおいて、規範意識の醸成は不可欠であると捉え、そのために必要な価値観である互惠性、規範意識の基盤となる「職場再建の三大原理」、安心な居場所づくりの基本であるルールとリレーションについても研究を進めていきたい。実践研究では集団指導と個別指導の指導原理に基づき、学級集団の発達過程とマズローの欲求階層説に応じながら、ルールの中でのふれあいや生徒指導の三機能及び自己有用感の醸成における指導・支援についての研究を行っていきたい。そして、本研究主題である「自発的、自治的な活動による自浄作用の働く学級集団の育成」に迫りたい。

## III 研究目標

豊かな人間関係の中で、自発的、自治的な活動による自浄作用の働く学級集団の育成を図るために、学級経営における集団指導と個別指導の指導原理に基づいた指導・支援の工夫について究明する。

#### IV 研究仮説

学級経営における集団指導と個別指導の指導原理に基づいた指導・支援の工夫を行えば、豊かな人間関係の中で、自発的、自治的な活動による自浄作用の働く学級集団の育成が図られるであろう。

#### V 研究内容

##### 1 理論研究

(1) 集団指導と個別指導の指導原理

(2) 集団指導

ア 学級集団の発達過程

イ 2対6対2の法則

ウ 特別活動の教育的意義

(3) 個別指導

ア 開発的生徒指導

イ 自己有用感の醸成

ウ マズローの欲求階層説

エ 規範意識の醸成

##### 2 意識調査

(1) 学級集団意識調査（6月）の方法

(2) 学級集団意識調査（6月）の考察

##### 3 本研究における「自発的」、「自治的」、「自発的・自治的な活動」、「自浄作用」の定義付け

(1) 「自発的」

(2) 「自治的」

(3) 「自発的・自治的な活動」

(4) 「自浄作用」

##### 4 実践研究

(1) ルールの中でのふれあい

ア グループアプローチに関する年間計画の作成

イ 職場再建の三大原理の意識化

ウ 学級内でのルールづくり

(2) 生徒指導の三機能

ア 学習の基本型の作成

イ チェックリストの作成

ウ 検証授業Ⅰの実施

(3) 自己有用感の醸成

ア コミュニケーションノートの活用

イ グループノートの活用

ウ 検証授業Ⅱの実施

##### 5 実践後の意識調査

(1) 学級集団意識調査（11月）の考察

(2) 実践内容に対する意識調査（6月・12月）の考察

## VI 研究計画

月	研究内容	研究事項	研究方法
4	○研究の方向性	○研究主題・副題・研究仮説の設定	○文献研究
5	○研究の方向性 ○理論研究 ○意識調査質問紙の作成	○研究内容・研究計画の設定 ○理論構築・研究概要の設定 ○意識調査質問項目の検討	○文献研究
6	○理論研究 ○意識調査（学級集団意識・実践内容に対する意識）の実施 ○検証授業Ⅰの構想	○理論構築・研究概要の設定 ○意識調査の考察 ○検証授業Ⅰ学習指導案の内容検討及び準備	○文献研究 ○質問紙調査
7	○理論研究 ○検証授業Ⅰの実施	○理論構築・研究概要の設定 ○検証授業Ⅰの成果と課題のまとめ	○文献研究 ○授業後アンケート調査
8	○グループ協議会に向けた準備	○グループ協議会用の資料・プレゼンテーション作成	○文献研究
9	○グループ協議会 ○検証授業Ⅱの構想	○グループ協議会の協議のまとめ ○検証授業Ⅱ学習指導案の内容検討及び準備	○文献研究
10	○検証授業Ⅱの実施	○検証授業Ⅱの成果と課題のまとめ	○文献研究 ○授業後アンケート調査
11	○意識調査（学級集団意識）の実施 ○全体協議会に向けた準備	○意識調査の考察 ○全体協議会用の資料・プレゼンテーション作成	○文献研究 ○質問紙調査
12	○全体協議会 ○意識調査（実践内容に対する意識）の実施	○全体協議会の協議のまとめ ○意識調査の考察	○文献研究
1	○研究のまとめ	○研究報告書の作成	○文献研究
2	○研究のまとめ ○主題研究発表会に向けた準備	○パネルの作成 ○主題研究発表会用の資料・プレゼンテーション作成 ○研究報告書の製本	○文献研究
3	○主題研究発表会	○主題研究発表会用の資料・プレゼンテーション作成	○文献研究



Ⅶ 研究構想

【目指す学級集団像】

自発的、自治的な活動による自浄作用の働く学級集団

【実践研究】

- (1) ルールの中でのふれあい  
 ア グループアプローチに関する年間計画の作成  
 イ 職場再建の三大原理の意識化  
 ウ 学級内でのルールづくり

- (2) 生徒指導の三機能  
 ア 学習の基本型の作成  
 イ チェックリストの作成  
 ウ 検証授業Ⅰの実施

- (3) 自己有用感の醸成  
 ア コミュニケーションノートの活用  
 イ グループノートの活用  
 ウ 検証授業Ⅱの実施

集団指導と個別指導の指導原理

意識調査

考察

【理論研究】

- (2) 集団指導  
 ア 学級集団の発達過程  
 イ 2対6対2の法則  
 ウ 特別活動の教育的意義  
 (7) 望ましい集団活動  
 (4) 児童生徒理解に基づいた教師の支援  
 (9) 望ましい話し合い活動

[定義付け]  
 「自発的」  
 「自治的」  
 「自発的・自治的な活動」  
 「自浄作用」

- (3) 個別指導  
 ア 開発的生徒指導  
 イ 自己有用感の醸成  
 ウ マズローの欲求階層説  
 エ 規範意識の醸成  
 (7) 互恵性  
 (4) 「職場再建の三大原理」  
 (9) ルールとリレーション

(1) 集団指導と個別指導の指導原理

【研究主題】

自発的、自治的な活動による自浄作用の働く学級集団の育成  
 ～学級経営における集団指導と個別指導の指導原理に基づいた指導・支援の工夫を通して～

【研究仮説】

学級経営における集団指導と個別指導の指導原理に基づいた指導・支援の工夫を行えば、豊かな人間関係の中で、自発的、自治的な活動による自浄作用の働く学級集団の育成が図られるであろう。

【研究目標】

豊かな人間関係の中で、自発的、自治的な活動による自浄作用の働く学級集団の育成を図るために、学級経営における集団指導と個別指導の指導原理に基づいた指導・支援の工夫について究明する。

## VII 研究の実際

### 1 理論研究

#### (1) 集団指導と個別指導の指導原理

生徒指導提要（平成 22 年文部科学省）では、集団指導と個別指導について「集団指導を通して個を育成し、個の成長が集団を発展させるという相互作用により、児童生徒の力を最大限に伸ばすことができるという指導原理があります。」と【図 1】のように示している。どちらの指導においても、「成長を促す指導」、「予防的な指導」、「課題解決的な指導」の 3つの目的に分けることができるが、双方は車の両輪のような関係があり、一方に偏ることなく、その両方の場面でバランスよく指導することと、両方の相互作用により、児童生徒の力を最大限に伸ばせるという生徒指導上の原理がある。よって、集団指導と個別指導は別々のものではなく、集団に支えられて個が育ち、個の成長が集団を発展させるように、相互作用によって、児童生徒は社会で自立するために必要な力を身に付けていけるのである。

【図 1】 集団指導と個別指導の指導原理



#### (2) 集団指導

##### ア 学級集団の発達過程

早稲田大学教授の河村茂雄氏（以下、河村氏）は、著書の中で、「望ましい学級集団の要素」として、次の 4 点を挙げている。

- |     |   |
|-----|---|
| I   | 集団内の規律、共有された行動様式（ルールの確立）  |
| II  | 集団内の子ども同士の良好な人間関係、役割交流だけではなく、感情交流や内面的なかかわりを含んだ親和的な人間関係（リレーションの確立） |
| III | 一人一人の子どもが学習や学級活動に意欲的に取り組もうとする意欲と行動する習慣                            |
| IV  | 集団内に、子どもたちの中から自主的に活動しようとする意欲、行動するシステム                             |

また、学級集団の状態は子どもたちの間の相互作用、インフォーマルな小集団の分化、子どもたちと教師との関係、それらの変化により学級集団の雰囲気や子どもたちの学級や教師に対する感情、行動傾向などに変化が起こると述べ、学級集団の状態の変化を、学級集団の発達過程と呼んでいる。そして、学級集団の発達過程を【表 1】のように 5 つの段階で整理している。

【表 1】 学級集団の発達過程

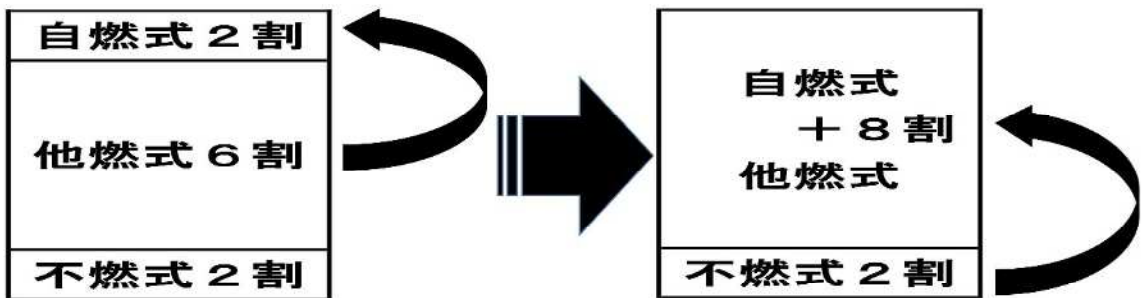
段階	学級集団の状態
第 1 段階 (混沌・緊張期)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学級編成直後の段階で、子ども同士に交流が少なく、学級のルールも定着しておらず、一人一人がバラバラの状態である。</li> <li>○ 集団への帰属意識も低い状態である。学級集団は堅苦しい雰囲気であり、すでにある友人関係に閉じこもったり、他の子どもと表層的なつき合いを試みたり、教師を知るために試し行動を行う子どもも見られる状態である。</li> </ul>
第 2 段階 (小集団形成期)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学級のルールが徐々に意識され始め、子ども同士の交流も活性化してくるが、その広がりには気心の知れた小集団にとどまっている状態である。</li> <li>○ 学級内では、一定の安定に達するまでに、小集団同士の友達の引っ張り合いや、トラブルがよく見られる状態である。</li> </ul>
第 3 段階 (中集団形成期)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学級のルールがかなり定着し、小集団同士のぶつかり合いの後に一定の安定に達した状態。指導力のあるリーダーのいる小集団などが中心となって、複数の小集団が連携でき、学級の半数の子どもたちが一緒に行動できる状態である。この時期は、そういう学級全体の流れに反する子どもや下位集団が明確になる時期でもある。</li> </ul>
第 4 段階 (全体集団成立期)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学級のルールが子どもたちにほぼ定着し、一部の学級全体の流れに反する子どもや小集団ともある程度の折り合いが付き、子どもたちがほぼ全員で一緒に行動できる状態である。</li> </ul>
第 5 段階 (自治的集団成立期)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学級のルールが子どもたちに内在化され、一定の規則正しい全体生活や行動が、温かな雰囲気の中で展開される。さらに課題に合わせてリーダーになる子どもが選ばれ、すべての子どもがリーダーシップをとりうるようになる。学級の問題は自分たちで解決できる状態である。子どもたちは自他の成長のために協力できる状態である。</li> <li>○ 前述の「望ましい学級集団の要素」がすべて満たされている。</li> </ul>

イ 2対6対2の法則

立正大学教授の田中輝美氏（以下、田中氏）及び高知大学教授の鹿嶋真弓氏（以下、鹿嶋氏）は、著書の中で、組織論の中の「2対6対2の法則」について、この理論は学級という組織の中でも同じことが考えられると述べている。

学級には2割の正統派の生徒、2割のそうでない生徒、6割の浮遊層の生徒がいて、正統派の生徒を自燃式、そうでない生徒を不燃式、浮遊層の生徒を他燃式に置き換えてみる。【図2】のように、2割の正統派である自燃式の生徒が大きな炎を燃やせば、6割の生徒である他燃式も一緒に燃えはじめる。すると2割と6割を足した8割の勢いとなるため、2割の正統派ではない不燃式の生徒もやがてはじわじわと燃え出す。また、一度でも燃えた経験があると、次に火種があればずっと燃えやすくなっていくというものである。

【図2】「自燃式の生徒・他燃式の生徒・不燃式の生徒」の構図



ウ 特別活動の教育的意義

(7) 望ましい集団活動

中央教育審議会答申（平成20年1月）における、特別活動の改善の基本方針の中に「生活を改善する話し合い活動を一層重視する」と示されている。特別活動においては、「望ましい集団活動を通して学ぶ」と、「なすことによって学ぶ」ことを方法原理としており、中学校学習指導要領解説特別活動編では、「望ましい集団活動」を、次のように述べている。

特に集団の各成員が互いに人格を尊重し合い、個人を集団に埋没させることなく、それぞれの個性を認め合い、伸ばしていくような活動を行うとともに、民主的な手続きを通して、集団の目指すべき目標や集団規範を設定し、互いに協力し合って望ましい人間関係を築き、充実した学校生活を実現していくことが必要である。

(1) 児童生徒理解に基づいた教師の支援

國學院大學教授の杉田洋氏（以下、杉田氏）は、著書の中で、学級集団を「水槽」、子どもたちを「魚」、そこでの生活や人間関係などの雰囲気を「水」に見立て、特別活動を次のように説明している。

魚たちがみな泳ぎ回るには、個々の魚にえさを注入するだけでは不十分です。水をきれいに浄化することを、あわせて行っていく必要があるのです。

そのためには、教師も一緒に水槽の中に入り、児童生徒理解に努め、生徒指導、教育相談、学級経営・学級づくりなどの手を上手にさしのべることです。

そのうえで、水槽の中に生活する魚（子ども）たち自身に、よりよい水（生活）づくりに自主的、実践的に、自発的、自治的に取り組ませようとするのが特別活動です。

【図3】学級集団を水槽に見立てる



【図3】は、杉田氏の学級集団を水槽に見立てた図を参考に、作成した図である。

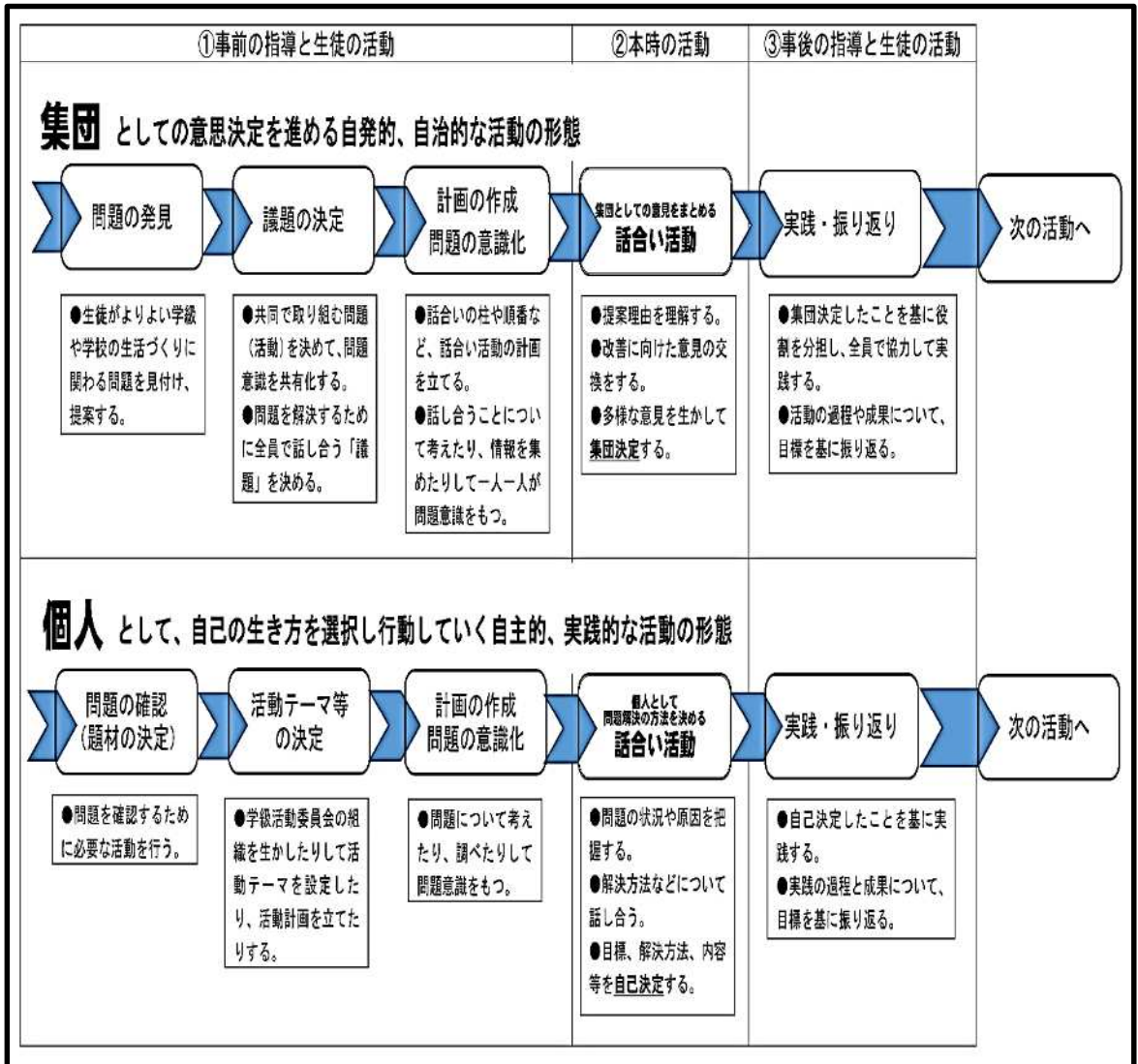


特別活動においては、教師と生徒、生徒相互の信頼関係が図られた学級集団の雰囲気をつくるのが大前提であると考え。そのためには、教師が日頃から生徒の発言のよさを認めることが重要である。また、その手法として、グループアプローチ等の参加・体験型の活動を計画的に取り入れることなどが有効と考える。

(ウ) 望ましい話し合い活動

国立教育政策研究所教育課程研究センターは、「学級・学校文化を創る特別活動 中学校編」の中で学級活動について焦点化して説明しており、特に「意見の違いを超え、望ましい人間関係につながる話し合い活動」について、【表2】のように詳細に解説していることから、話し合い活動が重視されていることが分かる。また、話し合い活動の視点の一つとして「一人一人の生徒が、目的意識や問題意識を明確にして話し合い活動に取り組むことができるように、事前の活動や指導を丁寧に進めるとともに、決まったことの実践化を図ることを重視する」を挙げている。教師の適切な指導の下での話し合い活動において、意見を出し合い、折り合いをつけながら、よりよい集団決定をすることで、豊かな人間関係づくりが図られるとともに、自発的、自治的な活動が展開される学級集団へと変容していくのではないかと考える。

【表2】話し合い活動の基本的な活動過程（学級活動の例）



(3) 個別指導

ア 開発的生徒指導

東京理科大学教授の八並光俊氏及び東京成徳大学教授の國分康孝氏は、著書の中で、開発的生徒指導とは、「すべての児童生徒を対象とした問題行動の予防や子どもの個性・自尊感情・社会的スキルの伸長に力点を置いた生徒指導のことである」と述べている。

また、愛知教育大学教職大学院教授の倉本哲男氏は、著書の中で、【表3】に示すように、生徒指導を3点に分類整理して示し、開発的生徒指導を、「出番→役割→承認」のサイクルで生徒一人一人が自分のよさに気づいたり、自分のよさを伸ばしたりする生徒指導の手法であると整理している。

【表3】生徒指導の種類

予防的 生徒指導	学級・学校等の集団秩序を保ち、集団性を高めるために必要な基本的生徒指導
対処的 生徒指導	生徒の問題行動が発生した場合に教育的に対応し、望ましい状態に導く生徒指導
開発的 生徒指導	生徒のよさを日常の教育活動から発見し、自覚させ、引き伸ばしていく生徒指導

したがって、開発的生徒指導とは、生徒一人一人に出番を設定し、そこで役割を与え、その役割を遂行したことを承認することによって、生徒のよさを更に伸ばしながら、自己有用感の醸成を図る生徒指導であるといえる。グループアプローチは、これらの手法を効果的に活用しており、学級集団に焦点を当てた集団の中で個を育てる生徒指導として、非常に有効であると考えられる。

イ 自己有用感の醸成

国立教育政策研究所生徒指導センターは、自己有用感とは、「人の役に立った、人から感謝された、人から認められたという自分と他者（集団や社会）との関係を自他共に肯定的に受け入れられることで生まれる、自己に対する肯定的な評価」と述べている。つまり、相手の存在なしには生まれてはこない点で、自尊感情や自己肯定感等とは異なる。

栃木県総合教育センター（平成25年）は、自己有用感に係る調査結果を因子分析した結果、自己有用感とは、主に「存在感」「承認」「貢献」という3つの要素で構成され、その中でも特に「存在感」が中心となる構成要素であることが分かったと報告している。あわせて、自己有用感を構成する要素そのものではないが、自己有用感の獲得につながる重要なものとして、「関係性」と名付けられる要素も分類されたと報告している。そして、4つの要素の内容を【表4】のように示し、自己有用感とはこれらの要素が相互に関連し合い、高まっていくと考えられると述べている。

【表4】自己有用感を構成する各要素の内容

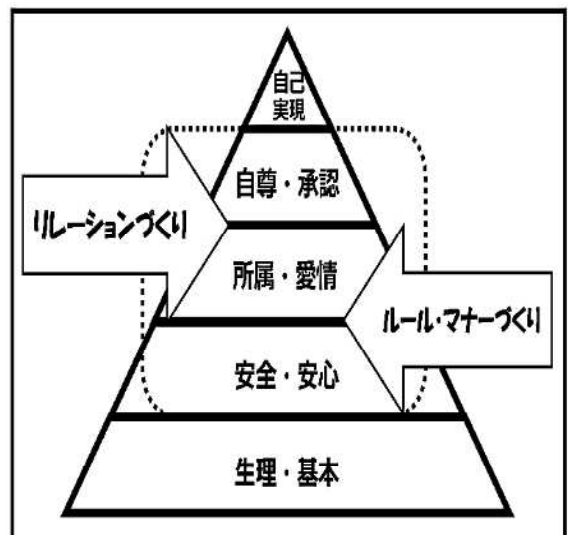
自己有用感を構成する要素	
存在感	他者や集団の中で、自分は価値のある存在であるという実感
承認	他者や集団から、自分の行動や存在が認められているという状況
貢献	他者や集団に対して、自分が役に立つ行動をしているという状況
自己有用感を構成する要素ではないが、自己有用感の獲得につながる要素	
関係性	他者や集団との関係の状況を示すもので、自己有用感の獲得の支えとなるもの

ウ マズローの欲求階層説

アメリカの心理学者マズローは自身の欲求階層説の中で「人間の欲求は5段階層に分類され、下位の層の欲求が満たされなければ上位の層の欲求は出てこない」と唱えている。この考え方は学級集団をつくっていく上で非常に有効であると考えられる。【図4】は、島根県教育センターが発行した「学級集団づくり魅力ガイドブック（平成25年）」を参考に、学級における生徒の欲求段階を示したものである。

子どもたちが成長していくことのできる学級集団を作っていくには、まず「生理的な欲求・基本的な欲求」を子どもたちに満たすことから始め、安心できる楽しい学級だと感じられる「安全

【図4】学級における生徒の欲求段階



の欲求・安心の欲求」を満たすことを考える。これら2つの欲求が満たされて安心感が支えられると、自分は学級の一員であると感じられる「所属の欲求・愛情の欲求」が生まれ、さらには互いに尊重し良さを認め、発揮し合える学級だと感じられる「自尊の欲求・承認の欲求」へと進んでいく。この段階では、子どもたち同士がかかわり合えるような取組を行ったり、一人一人が活躍できる場やお互いに認め合える場をつくったりすることが大切である。そして、最終的に特別活動の目標である「人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」に通じる「自己実現の欲求」へと促す。実践研究では、「安全の欲求・安心の欲求」から「所属の欲求・愛情の欲求」の段階において「ルール・マナーづくり」を図ることとする。そして、「所属の欲求・愛情の欲求」から「自尊の欲求・承認の欲求」の段階で「リレーションづくり」を図ることとする。

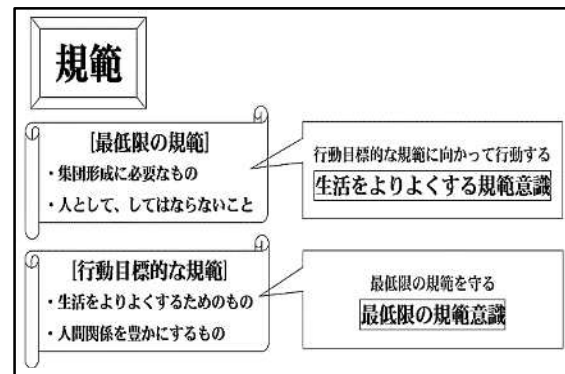
#### エ 規範意識の醸成

文部科学省によると、「規範」と「規範意識」は次のように定義されている。

<b>規範</b> ・・・人間が行動したり、判断したりするときに従うべき価値判断の基準
<b>規範意識</b> ・・・規範を守り、それに基づいて判断したり、行動しようとする意識

規範について、京都市総合教育センターカリキュラム開発支援センターが発行した「規範意識を育む活動プログラム例」(平成24年)には、「規範は、行動するときの価値判断の基準であることから、集団における規範とは、『集団に望まれる行動様式や行動基準を表すものである』ととらえることができる」と述べられている。【図5】は「規範意識を育む活動プログラム例」に示された規範を大きく2つに分類したものである。

【図5】規範と規範意識



#### (ア) 互惠性

文教大学准教授の新井立夫氏は、月刊誌のコラムの中で、規律や秩序を考える際に、不可欠な価値観として「互惠性」について述べている。「互惠」とは、互いに特別な便宜や利益などを与えたり、受けたりすることであり、規律を守る者が、規律によって守られ、学級の秩序を守ろうとする者が、学級の秩序によって守られるというものである。規律や秩序は、自分たちの学びや生活そのものに結びつくものであり、その集団意識に参加している自分たち全体の問題であるという意識に支えられているからこそ、有効に機能する価値観である。しかし、生徒たちの心の根底には「叱られるから規則やルールを守る」といった発想があることから、規範意識の醸成を図る上で、規則やルールを守ることが何のために必要かという点を理解させなくてはならない。そのためには、生徒同士が互惠性を共通認識した上で、豊かな人間関係を築いていく手立てが必要であると考えられる。

#### (イ) 「職場再建の三大原理」～時を守り、場を浄め(清め)、礼を正す～

国立教育政策研究所生徒指導センターは、『生徒指導体制の在り方についての調査研究』報告書「規範意識の醸成をめざして」の中で、規範意識の醸成のためには「人間社会における『当たり前のこと』を児童生徒に発達の段階に応じて身に付けさせなければならない。」と述べている。

戦前・戦後を通じて、日本の教育界に多大な影響を与えてきた教育者であり、哲学者であった森信三氏は、修身の授業の講義録をまとめた「修身教授録」の中で「時を守り、場を浄め、礼を正す。これ現実界における再建の三大原理にして、いかなる時、処にも当てはまるべし。」と述べている。また、「相手の心に受け入れ態勢が出来ていないのにお説教するのは、伏さったコップにビールをつぐようなものであり、入らぬばかりか、かえってあたりが汚れる。」と述べており、株式会社原田総合教育研究所代表取締役社長の原田隆史氏は、これを著書の中で

「心のコップを上向けて」という言葉で表現し、心のコップを上向いた状態にするために「職場再建の三大原理」の必要性を述べている。職場再建の三大原理は、私たちの生活習慣の基本となる当たり前のことであるのと同時に、みんなが気持ちよく、安心して過ごすための人間社会のルールであり、規範意識の基盤となるものであると考える。

(ウ) ルールとリレーション

早稲田大学現代教育実践研究所は、ルールとリレーションについて、次のように定義付けをしている。

- ルールとは、対人関係、集団活動・生活をする際のルールが全員に理解され、学級内に定着していることが必要である。ルールが定着していることで、子どもたちの中に傷つけられないという安心感が生まれ、友人との交流も促進される。
- リレーションとは、互いに構えのない、ふれあいのある本音の感情交流がある状態である。学級内の対人関係の中にリレーションがあることで、子どもたち同士の間仲間意識が生まれ、集団活動（授業、行事、特別活動など）が協力的に、活発になされる。

また、河村氏は著書の中で児童生徒の学級生活の満足感・充実感を向上させるためには、次のような内容が求められると述べている。

- 学級生活において人から傷つけられないこと、ストレスが低いこと
- 学級内で児童生徒一人一人の所属欲求、承認欲求を満たすこと

そして、上記の達成を目指し、教師は学級環境を整えたり、集団活動や授業などの展開を工夫したりしていかなければならないことにふれ、その指針として、次のような学級経営が必要であると述べている。

- 対人関係や集団生活のマナーやルールを児童生徒に共有させる。
- 教師と児童生徒、児童生徒同士の間でリレーションを形成する。
- ※ 学級生活の中に、児童生徒一人一人が認められる場面、方法を設定する。

また、この条件のもと、教師は学級集団の発達過程に即してさまざまな活動や取組を設定し、児童生徒がその課題について試行錯誤しながら問題解決し、その過程で学級集団での生活・活動に満足感が高まるように支援していくことが、グループアプローチの考え方を生かした学級経営の具現化といえると述べている。

2 意識調査

田中氏及び鹿嶋氏が作成した「愛着意識」「学級存在感」「学級配慮」「役割遂行意識」「学級結束」の5因子による【表5】の「中学生用学級集団意識尺度」（以下、学級集団意識尺度）を用い、学級集団意識調査を行った。

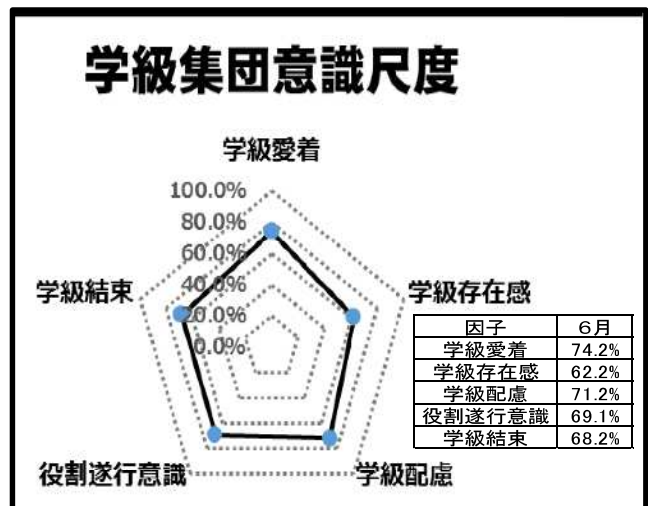
(1) 学級集団意識調査（6月）の方法

- 対象：所属校第2学年4組（37名）
- 調査方法：4段階尺度法を用いた5因子19問によるアンケート
- 質問項目：【表5】に示す

【表5】学級集団意識尺度による質問項目

因子	質問項目
学級愛着	今のクラスに入ってよかった
	今のクラスが好きだ
	今のクラスの人たちといつまでもいっしょにいたい
学級存在感	このクラスの仲間の一員であることがうれしい
	クラスの人に認められている
	クラスの人に大事にされている
学級配慮	クラスの人に役に立っている
	クラスの人に必要とされている
	何をしたらいいのか考えながら行動している
役割遂行意識	人を分かってあげようとしている
	クラスがどうしたらいいのか考えながら行動している
	私たちはお互いに助け合っている
学級結束	クラスのリーダーを支えようとしている
	私も場面によってはクラスのリーダーになることがある
	私はクラスの一員として責任を果たそうとしている
学級結束	クラスの中に自分の役割がある
	クラス全体で何かをやるときまとまりがある
学級結束	私のクラスではみんなでまとまって何かをしようという感じがある
	私がクラスで何かをやるときはみんなと協力している

【グラフ1】学級集団意識尺度による意識調査の結果



(2) 学級集団意識調査（6月）の考察

前頁の【グラフ1】に示すように、「学級愛着」において、70%以上の生徒は所属する自分の学級が好きだと回答している。その一方で、「学級存在感」において、40%程度の生徒は人に認められている、大事にされているという認識までには至っていないことがうかがえる。

3 本研究における「自発的」、「自治的」、「自発的・自治的な活動」、「自浄作用」の定義付け

理論研究における学びと学級集団意識調査の考察から、「自発的」、「自治的」、「自発的・自治的な活動」、「自浄作用」を、次のように定義付けする。

(1) 「自発的」

教師の適切な指導・支援の下、豊かな人間関係の中で、生徒が自ら進んで問題意識をもつこと

(2) 「自治的」

教師の適切な指導・支援の下、豊かな人間関係の中で、自分の所属する集団による民主的な手続きによって、決定した総意に基づいて行動すること

(3) 「自発的・自治的な活動」

- 学級への愛着をもち、自ら学級にかかわりながら活動している。(学級愛着)
- 学級の一員としての自覚をもち、学級の諸問題の解決に取り組みながら活動している。(学級存在感)
- 学級の諸問題の解決に向け、互いに助け合い、考えながら活動している。(学級配慮)
- 学級の諸問題の解決に向け、自分の役割を果たしながら活動している。(役割遂行意識)
- 学級の諸問題の解決に向け、互いに協力しながら活動している。(学級結束)

(4) 「自浄作用」

生徒の自発的・自治的な活動により、学級の諸問題を解決しながら望ましい学級集団に向かってよりよくしていこうとする働き

4 実践研究

実践研究の方法は、次のとおりである。また、学級集団意識尺度の5因子及び主な理論との融合を意識した実践内容を【表6】に示す。

- 対象：所属校第2学年4組（37名）
- 時期：平成27年5月～平成28年3月

【表6】学級集団意識尺度の5因子及び理論との融合を意識した実践内容

	学級愛着	学級存在感	学級配慮	役割遂行意識	学級結束	主な理論との融合	実施時期(場面)
グループアプローチ		○	○			特別活動の教育的意義 開発的生徒指導	通年 (学級活動)
職場再建の三大原理 (振り返りシート)		○ (礼)	○ (場・礼)		○ (時)	規範意識の醸成	通年 (帰りの会)
ルールづくり (グループルール・「5つの愛」)	○	○	○	○	○	マズローの欲求階層説 規範意識の醸成	5月 (学級活動)
生徒指導の三機能(授業)	○	○	○	○	○	生徒指導の三機能	通年 (各教科等)
コミュニケーションノート		○		○		自己有用感の醸成	通年 (日常)
グループノート		○	○			自己有用感の醸成	通年 (日常)
話合い活動	○	○	○	○	○	マズローの欲求階層説 自己有用感の醸成	通年 (学級活動)

(1) ルールの中でのふれあい

ア グループアプローチに関する年間計画の作成

平成26年度宮崎県教育研修センターの新垣智規研究員は、実践研究において、学級集団の発達段階に応じた開発的な教育相談と話合い活動の系統的な指導を行うため、年間計画を作成している。これを参考に、学級集団に焦点を当てた集団の中で個を育てる生徒指導として、学級集団の



発達過程と欲求階層の段階に応じたグループアプローチと話し合い活動の系統的な指導を行うため、【表7】を作成した。

【表7】グループアプローチに関する年間計画

時期	学級集団の発達過程	欲求階層の段階	グループアプローチのタイトル名	学校行事
4月～	第1段階 混沌・緊張期	生理・基本の欲求～ 安全・安心の欲求	○ 「不愉快度チェック」で、グループルールをつくろう	始業式
5月～ 7月	第2段階 小集団形成期	安全・安心の欲求～ 所属・愛情の欲求	○ 「うれし言葉ビンゴ」「嫌な言葉ビンゴ」で、マナーを確認しよう	生徒総会
9月～ 10月	第3段階 中集団形成期	所属・愛情の欲求～ 自尊・承認の欲求	○ 「新聞タワー」でクラスの強みをみつけよう ○ みんなに「ベスト〇〇賞」を贈ろう（合唱コンクール終了後）	体育大会 終業式 始業式 文化発表会
11月～ 12月	第4段階 全体集団成立期	自尊・承認の欲求	○ 2学期に向けて、クラスをブラッシュアップ！	修学旅行
1月～ 3月	第5段階 自治的集団成立期	自己実現の欲求	○ 共に歩んだ1年を振り返って「これがわたしの生きる道」	立志式 卒業式 終了式

イ 職場再建の三大原理の意識化

職場再建の三大原理である「時を守り、場を浄め（清め）、礼を正す」を当たり前のこととしてとらえ、習慣化させる手立てとして学校生活の中で具体的に意識させたい項目をピックアップし、

【表8】のような「振り返りシート」を作成した。そして、振り返りシートをもとに、帰りの会時に振り返りを行わせた。

ウ 学級内におけるルールづくり

早稲田大学教授の菅野純氏は、著書の中で人とつながっていくための心のエネルギーについて「安心できること」「楽しい体験をすること」「認められる体験をすること」の3つの要素を挙げている。また、特に大切にしたい要素として「安心できること」を挙げており、安心できる関係や学級とは、人間関係のルールや集団生活におけるルールが定着している学級であるにとらえる。

以上のことから、学級内におけるルールとして【写真1】の「グループルール」と【写真2】の「5つの愛（助け愛・教え愛・認め愛・励まし愛・支え愛）」を設定した。

【写真1】グループルール



【写真2】「5つの愛」



(2) 生徒指導の三機能

ア 学習の基本型の作成

基本的な学習の流れに沿って、目指す生徒の姿を想定しながら、次頁の【表9】のような生徒指導の三機能を生かした学習の基本型を作成し、教師の支援の在り方を明確にした。

【表9】学習の基本型

### 生徒指導の三機能を生かした学習の基本型

○ 目指す生徒の姿 □ 教師の支援

過程	主な学習の流れ	自己存在感	共感的人間関係	自己決定
授業前		○ 学習用具の準備、学習に対する姿勢が整い、生き生きとした表情をしている。 □ 温かい雰囲気を作るための声かけをする。	○ 互いに授業に臨み落ち着いた雰囲気をつくろうとしている。 □ 前もって教室に行き、授業の準備を見届け、黙想への声かけをする。	○ 「学習の心得」にしたがって、一人一人が主体的に行動しようとしている。 □ 主体的な行動を促し、必要であれば支援をする。
導入	1 学習内容への関心を高める。 2 学習課題（問題）を把握する。	○ 提示教材に興味関心を示している。 □ 生徒が興味関心をもつように教材の提示方法を工夫する。		○ 学習課題（問題）を把握し、学習への見通しをもって取り組もうとしている。 □ 一人一人が学習課題（問題）を把握し、見通しをもって取り組める工夫をする。
展開	3 課題解決を図る過程で、話し合ったり、発表し合ったりする。	○ 生き生きと意欲的に考えたり、調べたり、話し合ったりしている。 □ 考えたり、問題を解いたり、発表したりする時間を確保する。 □ 話し合いの具体的な視点を与え、考えを出し合い、話し合う手立てをとる。 □ 意図的に指名したり、つぶやきを活用したりして、多くの生徒の考えを生かすようにする。	○ 互いの意見を聞き合ったり、他者の意見を生かして発言をつなげたりして、互いに高め合おうとしている。 □ 互いの意見を聞き合う雰囲気を保ち、意見交換を促す働きかけを行うために、学習形態を工夫する。 □ 多様な考えを認める雰囲気や場の工夫をする。	○ 自分自身で思考し、自分なりの考えをもって学習している。 □ 個に応じた支援を行い、自力で解決できるようにする。 □ 思考・判断・表現する場の設定をする。
終末	4 まとめる。	○ 学習の達成感を感じている。 □ 生徒が自分自身の取組を振り返る場を設定する。	○ 互いのよさを認め合っている。 □ 互いのよさを認め合う場を設定する。	○ 学習の成果（分かったこと、まだよく分からないこと）に実感をもつ。 □ 未解決の部分や理解が十分でないところを把握し、次時への学習意欲を高める手立てを講じる。

#### イ チェックリストの作成

教師自身が授業を振り返り、生徒指導の三機能を生かした授業力向上を図るため、【表10】のようなチェックリストを作成した。これは、自己反省の際や研究授業の視点表に用いた。

#### ウ 検証授業Ⅰの実施

【表10】チェックリスト

検証授業Ⅰの実実施時期が集団指導における学級集団の発達過程の第2段階（小集団形成期）と個別指導における欲求階層の「安全の欲求・安心の欲求」から「所属の欲求・愛情の欲求」の段階にあたることを考え、「ルール・マナーづくり」を図ることとした。検証授業Ⅰでは道徳において、「きまりを守る」を主

		4：よくしている	3：ときどきしている	2：あまりしていない	1：ほとんどしていない	評価
自己存在感	1	生徒が興味・関心をもつように教材の提示方法を工夫していますか。				
	2	生徒一人一人が、考えたり、問題を解いたりなどの時間を確保していますか。				
	3	話し合いの具体的な視点を与え、一人一人が考えを述べ、話し合う手立てを講じていますか。				
	4	自己評価を行うなど、生徒が自分自身の取組を振り返る場を設定していますか。				
共感的人間関係	5	互いの意見を聞き合う雰囲気を保ち、多様な考えを認め合える雰囲気や場の設定をしていますか。				
	6	相互評価を行うなど、互いのよさを認め合う場を設定していますか。				
自己決定	7	生徒一人一人が見通しをもって取り組めるように、学習課題（問題）を明示していますか。				
	8	生徒一人一人が思考・判断・表現できる場を設定していますか。				

題に規則やきまりを守る意識（規範意識）の向上をねらいとした。また、アンケートによる実態調査の結果、学級集団意識尺度における「学級存在感」が特に低いことから、生徒指導の三機能を生かした学習の基本型をもとに、「自己存在感」を与える場面に工夫を凝らすこととした。

次頁の【表11】は検証の視点、【表12】は指導過程の一部を示したものである。

【表 11】 検証の視点

検証の視点1	生徒指導の三機能（自己決定の場を与える・自己存在感を与える・共感的人間関係を育成する）を生かすことができたか。
検証の視点2	規則やきまりを守る意識（規範意識）を高めることができたか。

【表 12】 学習指導過程の一部（第2学年道徳 主題名「きまりを守る」資料名「元さんと二通の手紙」）

※ 生徒指導の三機能を生かす場面[自己存在感=存 共感的人間関係=共 自己決定=決]

段階	学習内容及び学習活動	予想される生徒の反応	指導上の留意点	資料・準備
展開前段	4 資料1を読んで、考える。 ○ 元さんが保護者同伴という規則を破って、姉弟を入園させた理由は何だろう。	・ 何か事情があって、親といっしょに来られないということに察しがあったから。	○ 元さんの内面に視点をあて、深く考えられるようにする。 (存2)	資料1 発問カード ワークシート
	5 資料2を読んで、考える。 ○ 姉弟を入園させた元さんについて考えよう。 ※入園させたことに賛成か（青）反対か（赤）を考え、三角柱を机に立てる。自分の理由をワークシートに書いた後、班を作り、その理由について話し合う。	<賛成> ・ 弟を思う姉のやさしさに感動したから。 ・ 子どもだけでも大丈夫だから。 <反対> ・ 姉の気持ちは分かるが、規則は守らないといけないから。 ・ 子どもだけでは心配だから。	○ 元さんの悩みを自分に引きつけて判断し、その理由づけを大切にしよう促す。 (存3・共5・自8)	資料2 発問カード ワークシート 青三角柱 赤三角柱
	6 班の代表が出てきた意見を発表する。		○ あらかじめ決めておいた代表者が発表する。	
展開後段	7 資料3を読んで、考える。 ○ 「この年になって初めて考えさせられたこと」とは何だろう。	・ 規則を破ると、結局は他人に迷惑をかけてしまうということ。 ・ 規則を破ると罰を受けるということ。	○ 規則を守るとは、生命を守ること、社会秩序を守ること、すべての人の権利が認められることにつながるということに気づかせる。 (存2)	資料3 発問カード ワークシート
	8 さまざまな意見を聞いて、もう一度三角柱を机に立てる。		○ 三角柱を握らせ、考えが変わった場合は変えるよう伝える。 (自8)	青三角柱 赤三角柱
	9 これまでの自分の行動を振り返り、思ったことをワークシートに記入する。		○ 自分の行動を振り返らせ、きまりの意義について考えさせる。 (存4・共6)	ワークシート

チェックリストの番号



(7) 検証の視点1について

a 自己存在感を与える（【グラフ2】）

「自分の存在を強く感じる場面がありましたか？」において、「あった」と答えた生徒の主な理由は、次のとおりである。

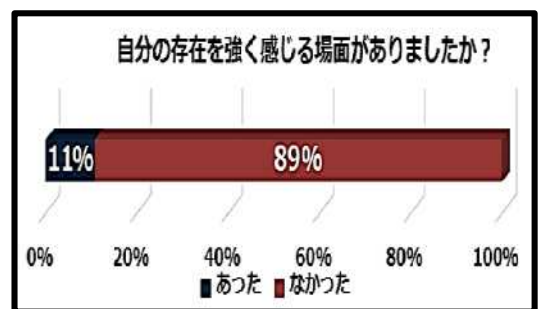
- 自分の意見をはっきりと伝えられたから。
- 友達が自分の意見を真剣に聞いてくれたから。

b 共感的人間関係を育成する（【グラフ3】）

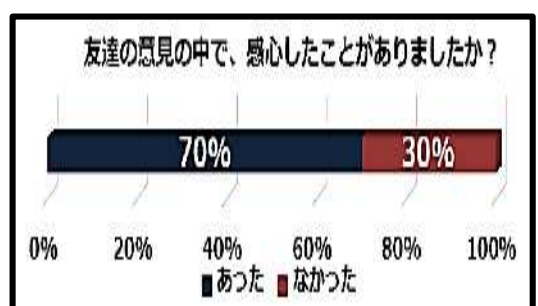
「友達の見解の中で、感心したことがありましたか？」において、「あった」と答えた生徒の主な理由は、次のとおりである。

- 自分の気付いていないことに気付いていたから。
- 発表の内容が分かりやすく、説得力があったから。

【グラフ2】 自己存在感について



【グラフ3】 共感的人間関係について



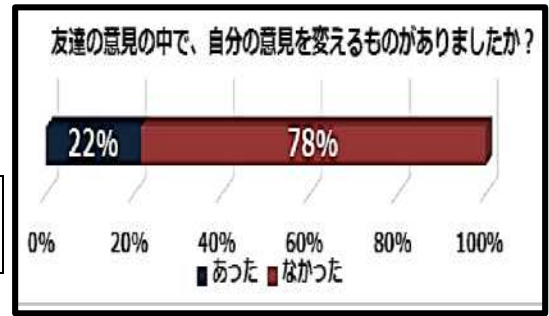


c 自己決定の場を与える（【グラフ4】）

「友達の見の中で、自分の意見を変えるものがありましたか？」において、「あった」と答えた主な理由は、次のとおりである。

- 友達の意見に納得したから。
- 友達の意見を聞き、もう一度考え直したから。

【グラフ4】自己決定について

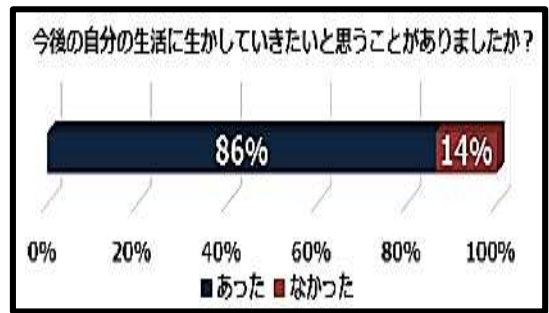


(4) 検証の視点2について（【グラフ5】）

「今後の自分の生活に生かしていきたいと思うことができましたか？」において、「あった」と答えた主な理由は、次のとおりである。

- きまりのルールの大切さが分かったから。
- きまりやルールのもとで安心した生活が送れることが分かったから。

【グラフ5】規範意識について



(5) 検証授業 I の成果

- 中心発問において、自分の考えを決め、色三角柱を用いて表現できる場を2回設定したことで、主体的に自分で決めることの大切さを気付かせることができた。
- 中心発問に対して、自己決定をさせた上でそれぞれの意見を話し合わせたことで、共感的人間関係の醸成を図ることができた。
- 社会や学級において、きまりやルールを守ることで、安心・安全な生活が保たれていることや、安心感のある学級にするためには、人間関係のルールやマナー、学習ルールなどを、学級で共有していかなければならないということに気付いた生徒が多かったことがうかがえた。

(6) 検証授業 I の課題

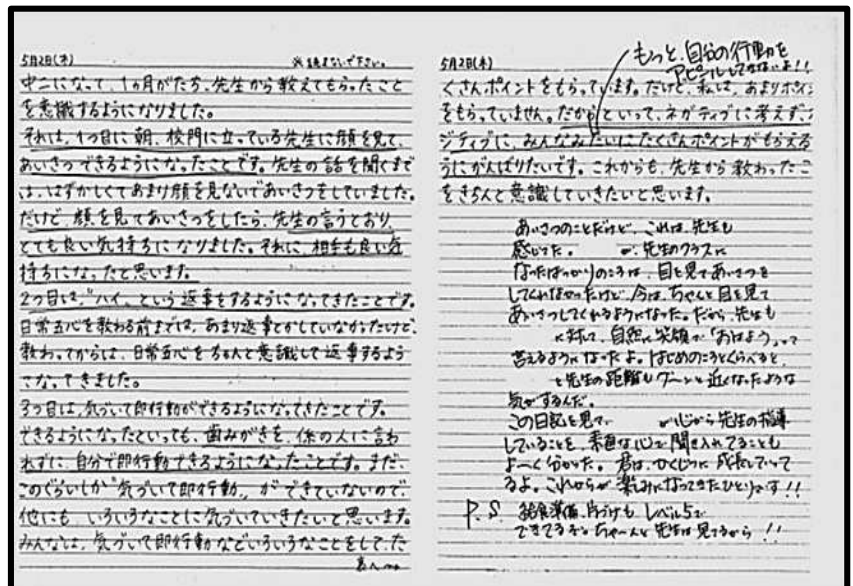
- アンケート結果から、自己存在感については、自分の価値を実感し、自分を肯定的に見るまでには至ってはいないことがうかがえた。今後、学級生活において共に学び、共に活動する中で、お互いに自分のよさを発揮し合いながら、自分自身への価値感や存在感を高めることができるような指導の工夫・改善が必要である。

(3) 自己有用感の醸成

ア コミュニケーションノートの活用

教師と生徒の信頼関係が図られた学級集団の雰囲気づくりと生徒の自己有用感の醸成を図るためには、教師が日頃から生徒の発言のよさを認めることが重要である。そこで、5月より交換日記感覚で教師生徒間のコミュニケーションノートを活用した。内容について

【写真3】コミュニケーションノート



は基本的に自由とし、学校行事前や学級内の問題が浮き彫りになった時などにはテーマを与えるなどの工夫を凝らした。教師側のコメントは親近感をもたせるため、色ペンを使った丸文字で書き、「君がいるから助かっている」「君のことを真剣に考えている」などのメッセージが伝わるよう心がけた。自己有用感や自尊感情、自己存在感がうかがえるものについては、本人の了解をとり、帰りの会や学級活動等で紹介したり、学級通信に掲載したりしながら、承認する場面を設けた。前頁の【写真3】はある生徒のコミュニケーションノートである。

#### イ グループノートの活用

生徒相互のレポートが図られた学級集団の雰囲気づくりと生徒の自己有用感の醸成を図るため、グループ内で毎日回覧させるグループノートを活用した。内容については、友達のよさを伝えたり、アドバイスを送るなどのポジティブな内容のみに限定し、グループ内でそれぞれの考えやアドバイスをもらいながら、悩みなどの解消につながることを目的とした。また、定期的に学級担任も加わりながら、生徒理解に努めた。

#### ウ 検証授業Ⅱの実施

検証授業Ⅱの実施時期が集団指導における学級集団の発達過程の第3段階（中集団形成期）と欲求階層の「所属の欲求・愛情の欲求」から「自尊の欲求・承認の欲求」の段階にあたりと考へ、「リレーションづくり」を図ることとした。検証授業Ⅱでは学級活動において、「5つの愛」で、クラスの絆をさらに深めよう」を題材に、自発的、自治的な話し合い活動を通して、合唱コンクールに向けた練習における問題点の共有化を図りながら学級に対する所属感や連帯感を深め、解決策の共有化を図りながら協力して実践する態度を育むことをねらいとした。そして、本時の事前、事後にリレーションづくりの手立てとして、2対6対2の法則に基づいた合唱リーダーミーティングを開き、教師の適切な指導・支援のもとに、ふれあいのある本音の感情交流ができる話し合い活動となるよう準備を進めることとした。また、本時の話し合い活動においては、生徒指導の三機能を生かした学習の基本型をもとに、「自己存在感」を与える場面に工夫を凝らしながら、生徒一人一人が活躍できる場やお互いに認め合える場を設けることを意識し、自己有用感の醸成を図ることとした。【表13】は検証の視点、【表14】は事前、事後の指導と生徒の活動、次頁の【表15】は学習指導過程の一部を示したものである。

【表13】 検証の視点

検証の視点1	話し合い活動の中で、生徒指導の三機能（自己決定の場を与える・自己存在感を与える・共感的人間関係を育成する）を生かすことができたか。
検証の視点2	話し合い活動を通し、課題解決のため、グループの仲間と協力しながら意見を述べ合うことで、集団への貢献や集団からの承認を実感することができたか。

【表14】 事前、事後の指導と生徒の活動

期日	活動の場	活動の内容	指導上の留意点	目指す生徒の姿と評価方法
9月29日 (火)	放課後 (合唱リーダーミーティング)	○ 合唱リーダーに、学級全体で合唱コンクールに向けた話し合い活動を実施することを伝える。 ○ 合唱リーダーの役割を確認し、本時の話し合い活動の趣旨や流れを確認する。	○ 合唱リーダーを中心とした話し合い活動ができるように、本時の流れなどを検討するとともに、リーダーの本音を引き出す。	【関心・意欲・態度】 ○ 合唱リーダーを中心とした話し合い活動が深まるよう、自発的、自治的に準備を進めようとしている。 【観察】
10月6日 (火)	放課後 (合唱リーダーミーティング)	○ グループでの話し合い活動において、「5つの愛」の視点から考えた「みんなのテンションを上げるフィンプレー」で出た事柄を整理し、模造紙にまとめる。	○ 整理しにくいものについては、助言する。	【関心・意欲・態度】 ○ 合唱リーダーとして「5つの愛」を使った合唱練習になるようにグループで出た事柄を話し合いながら整理している。 【観察】
10月20日 (火)	学級活動 (グループアップローチ「みんなにベスト〇〇賞を贈ろう」)	○ 活動過程や合唱コンクール当日を振り返り、互いの良さを賞賛しながら、今後の学校生活の在り方について考える。	○ 生徒の活躍について、具体例を示して賞賛する。	○ 合唱コンクールの成功に向けて、学級で取り組むことの意義について理解している。 【振り返りシート】

【表 15】学習指導過程の一部（第 2 学年学級活動 題材名「5つの愛、で、クラスの絆をさらに深めよう」）

※ 生徒指導の三機能を生かす場面[自己存在感=存 共感的人間関係=共 自己決定=決]

	活動の内容	指導上の留意点	目指す生徒の姿と 評価方法	資料・準備
活 動 の 展 開	6 話し合い活動 [存1・存2・存3・共5・決8] (1) 「みんなのテンションを下げるNGプレー」を出し合いながら共有し合い、KJ法でまとめる。(グループ)	○ グループでの話し合い活動の際には、机間指導を行いながら以下の視点で助言する。 司会者は、グループ全員に意見を求めるよう指示する。 ・ 本時の議題やねらいからずれてきていたら修正する。	【関心・意欲・態度】 ○ 議題に関心をもち意欲的に自分の考えを伝えたり、まとめたりしようとしている。 【観察】	付箋 付箋シート テレビ 実物投影機
	(2) 各グループで出た事柄を代表者が発表し、学級全体で共有する。(一斉)	○ 発表が出ない場合は、教師が入り、コミュニケーションノートやグループノートの内容を伝えた上で本音を出させる。	【観察】	
	(3) 学級全体で共有したNGプレーから、感じたことを発表する。	○ 発表が出ない場合は、教師が入り、コミュニケーションノートやグループノートの内容を伝えた上で本音を出させる。	【観察】	
	(4) グループを作り、「みんなのテンションを上げるファインプレー」を「5つの愛」の視点から出し合いながら、KJ法でまとめる。(グループ)	○ 合唱コンクールを成功させるために、学級全体において、問題解決策の共有化を図る。	【思考・判断・表現】 ○ 互いの意見や考えを認め合い、提案理由や学級内のルールである「5つの愛」を意識しながら意見や考えを述べている。 【観察】	付箋(4色) 付箋シート
	(5) 各グループで出た事柄を代表者が発表し、学級全体で共有する。(一斉)	○ 合唱コンクールを成功させるために、学級全体において、問題解決策の共有化を図る。	【観察】	

**チェックリストの番号**



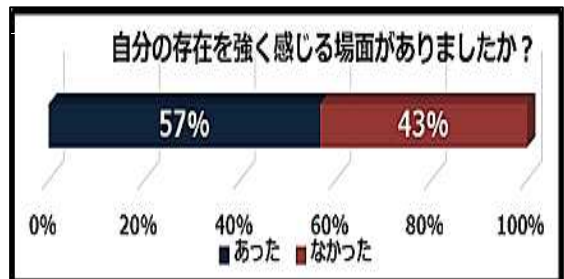
(ア) 検証の視点1について

a 自己存在感を与える【グラフ6】

「自分の存在を強く感じる場面がありましたか？」において、「あった」と答えた主な理由は、次のとおりである。

- 自分の意見に賛成してくれたから。
- 注意する立場も理解してくれていることが分かったから。

【グラフ6】自己存在感について

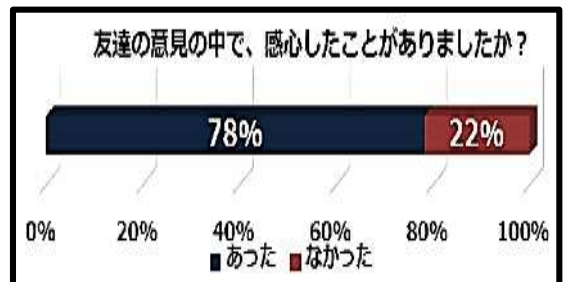


b 共感的人間関係を育成する【グラフ7】

「友達の見意の中で、感心したことがありましたか？」において、「あった」と答えた主な理由は、次のとおりである。

- 5つの愛をうまく使った意見だったから。
- クラスのことを真剣に考えていたから。

【グラフ7】共感的人間関係について



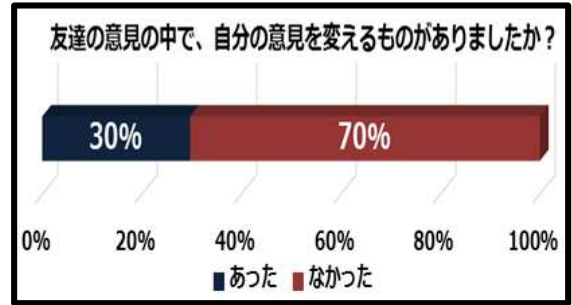


c 自己決定の場を与える（【グラフ8】）

「友達の見の中、自分の意見を変えるものがありましたか？」において、「あった」と答えた主な理由は、次のとおりである。

- 友達の意見のNGプレーの中に、自分の行動もあったから。
- 合唱に対してまだ真剣になっていない自分に気付けたから。

【グラフ8】自己決定について



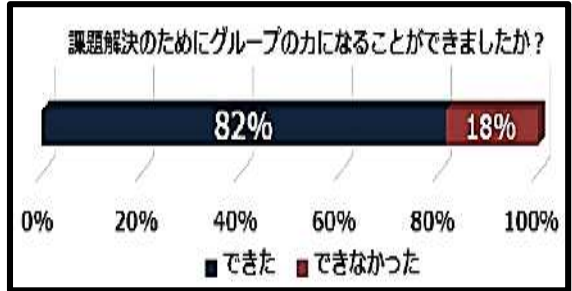
(イ) 検証の視点2について

a 集団への貢献の実感（【グラフ9】）

「課題解決のためにグループの力になることができましたか？」において、「できた」と答えた主な理由は、次のとおりである。

- クラスのことを真剣に考えながら、積極的に意見を出したから。
- グループの人と討論しながら解決策を考えたから。

【グラフ9】集団への貢献について

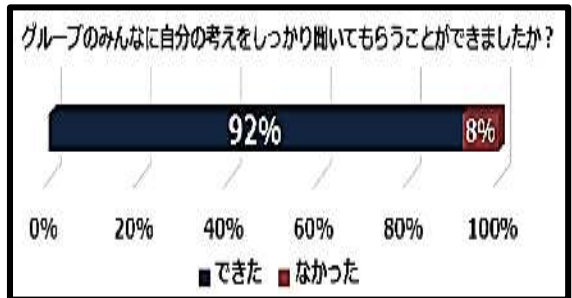


b 集団からの承認の実感（【グラフ10】）

「グループのみんなに自分の考えをしっかりと聞いてもらうことができましたか？」において、「できた」と答えた主な理由は次のとおりである。

- 自分の意見に賛成してくれたから。
- 真剣に聞いてくれ、自分の意見をほめてくれたから。

【グラフ10】集団からの承認について



(ウ) 検証授業Ⅱの成果

- アンケートの自己存在感の項目において、肯定的な回答の割合が検証授業Ⅰ後の11%から57%へ増加していることから、一人一人が主体的に参加できる話し合い活動を通して、自分自身への価値や存在をもつことができる生徒が増えたものとする。
- 教師の適切な指導・支援の下に自発的、自治的なリーダーミーティングや話し合い活動を行い、互いの意見を生かした討論により、折り合いをつけながら合意形成によって集団決定をしたことで、その後に協力して実践する姿が見られた。
- アンケートの集団の貢献・承認の項目において、肯定的な回答の割合が高いことや感想の内容から、グループの仲間と協力しながら、意見を述べ合う話し合い活動が、自己有用感を醸成する上で有効であると考えられる。

【写真4】学級全体での話し合い活動の様子



【写真5】グループでの話し合い活動の様子



(エ) 検証授業Ⅱの課題

- 学級全体における話し合い活動において、個が集団に埋もれることなく、自分の意見を生き生きと発表するための手立てが必要である。

## 5 実践後の意識調査

### (1) 学級集団意識調査 (11月) の考察

【グラフ11】に示すように、6月の意識調査において、肯定的な回答をした生徒の割合が最も低かった学級集団意識尺度の因子「学級存在感」において上昇が見られた。この要因は、実践項目のすべてがこの因子を意識したものであったことや、中でもグループアプローチや話し合い活動の中で、集団に貢献し承認されることを通して、自分は価値のある存在であるという実感をもつことができたことであると考える。また、その他の因子においても上昇が見られたが、それぞれの因子を意識した実践の効果であると考えられる。

### (2) 実践内容に対する意識調査 (6月・12月) の考察

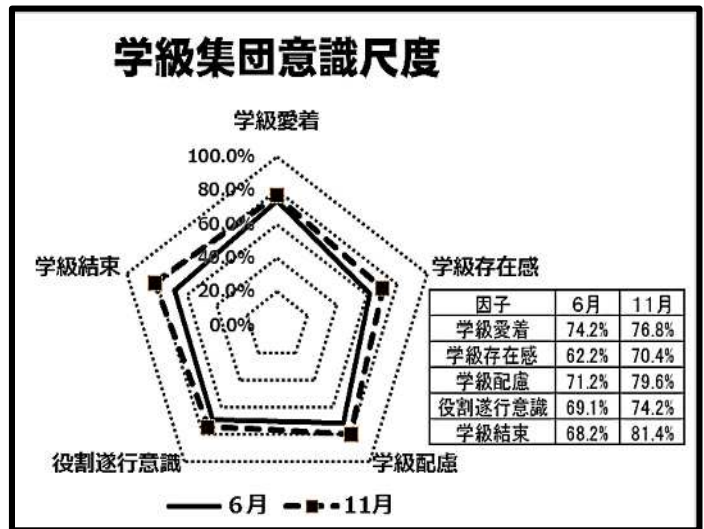
【グラフ12】に示すように、すべての質問項目において、上昇が見られる。

①に関しては、振り返りシートの活用や学級専門委員会後のリーダーミーティングで決まった取組を行ったことにより、意識化が図られたと考える。

②に関しては、学校行事の成功に向けたグループアプローチや話し合い活動を通して意識化が図られたと考える。

③と④に関しては、ノートを活用しながら役割を遂行したことへの承認を行ったことが、自己有用感の醸成にもつながったと考える。

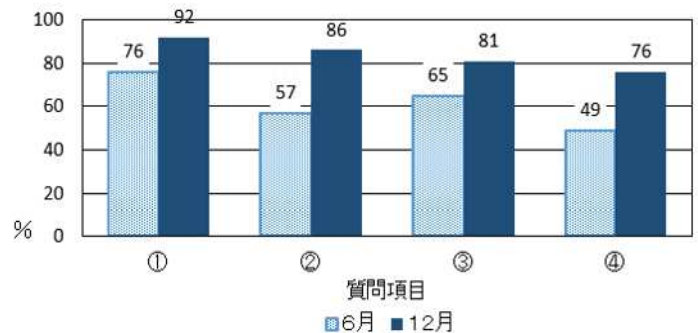
【グラフ11】学級集団意識尺度による意識の変容



【表16】アンケートの質問項目

- ① 「時を守り、場を清め、礼を正す」を意識しながら生活できている。
- ② 「グループルール」や「5つの愛」を意識しながら生活できている。
- ③ コミュニケーションノートで先生から認められたと感じたことがある。
- ④ グループノートで友達から認められたと感じたことがある。

【グラフ12】実践内容に対する意識の変容(肯定的な回答)



## Ⅸ 研究の成果と今後の課題

### 1 研究の成果

#### (1) 集団指導の視点から

- 学級集団の発達過程と欲求階層の段階を意識しながら、特別活動においてグループアプローチと話し合い活動を効果的に組み合わせたことにより、集団に貢献し、承認される機会が増え、自己存在感を高めながら豊かな人間関係づくりも図られた。
- 様々な活動場面において、教師の適切な指導・支援の下にリーダーミーティングを行ったことにより、2対6対2の法則の効果が見られ、リーダーの成長と共に生徒の自発的、自治的な活動がうかがえるようになった。

#### (2) 個別指導の視点から

- 係活動や学校行事等を通して、生徒一人一人に出番、役割、承認のサイクルによる開発的生徒指導を実践し、承認の場面においては、コミュニケーションノートやグループノートを活用したことが、自己有用感の醸成や学級集団意識の向上につながった。
- 生徒の学期反省から、振り返りシートを活用した職場再建の三大原理や学級内におけるルールの意識化が、個人や学級集団の生活習慣の向上につながり、それに伴って生徒同士のリレーション形成が図られることが明らかになった。



## 2 今後の課題

### (1) 集団指導の視点から

- 規則やルールを守ることが何のために必要なのかという互惠性の価値観を共通認識させるまでには至っていないため、今後は定義した自浄作用の働く学級にベクトルを向けながら、その手立ての工夫を模索していく必要がある。
- 自発的、自治的な活動を促すため、学級集団の発達過程や欲求階層の段階を意識しながら実践を行ったが、それぞれの計画した段階と学級や生徒の実態が異なる部分もあったため、実態を的確に把握した上で実践していく必要がある。

### (2) 個別指導の視点から

- 自浄作用の働く学級集団の育成を図っていく過程において、教師と生徒が「共汗」することの重要性を改めて感じたのと同時に、個々に応じた効果的な教育相談の必要性も感じたため、今後は、組織的に予防・開発的な教育相談を推進していく必要がある。

## おわりに

理論研究により、学級集団の発達過程や欲求階層の段階等について書籍や先行研究から学んだことは、検証授業等に生かされただけでなく、これまでの教育実践を見つめ直すことができ、更に今後の教育実践において、学級集団づくりや開発的生徒指導への転換を図っていくための契機となった。また、集団指導と個別指導の両輪から実践研究を行ってきたことにより、集団に支えられて個が育ち、個の成長が集団を発展させるという相互作用の効果が明らかとなり、学級担任としての役割や生徒理解の重要性を再認識することができた。

## 参考・引用文献等

- |                                       |                                     |
|---------------------------------------|-------------------------------------|
| 「第二次宮崎県教育振興基本計画」                      | (平成 22 年 宮崎県教育委員会)                  |
| 「学級・学校文化を創る特別活動(中学校編)」                | (平成 26 年 文部科学省国立教育政策研究所)            |
| 「日本の学級集団と学級経営」                        | (平成 22 年 河村茂雄 図書文化社)                |
| 「生徒指導提要」                              | (平成 22 年 文部科学省)                     |
| 「よりよい人間関係を築く特別活動」                     | (平成 21 年 杉田洋 図書文化社)                 |
| 「中学生の自律を育てる学級づくり」                     | (平成 26 年 田中輝美・鹿嶋真弓 金子書房)            |
| 「新生徒指導ガイド」                            | (平成 20 年 八並光俊・国分康孝氏 図書文化社)          |
| 「生徒指導リーフ Leaf. 18」                    | (平成 27 年 文部科学省国立教育政策研究所)            |
| 「開発的生徒指導論と学校マネジメント」                   | (平成 19 年 倉本哲男 ふくろう出版)               |
| 「高めよう！自己有用感」                          | (平成 25 年 栃木県総合教育センター)               |
| 「中学校学習指導要領『総則』」                       | (平成 20 年 9 月 文部科学省)                 |
| 「学級集団づくり魅力ガイドブック」                     | (平成 25 年 島根県教育センター)                 |
| 「児童生徒の規範意識を育むための教師用指導資料」              | (平成 18 年 5 月 文部科学省)                 |
| 「子どもたちがよりよい人間関係を築くための規範意識を育む活動プログラム例」 | (平成 24 年 京都市総合教育センターカリキュラム開発支援センター) |
| 「現代の子どもたちのつながる力」                      | (平成 23 年 菅野純 金子書房)                  |
| 「『生徒指導体制の在り方についての調査研究』報告書」            | (平成 18 年 国立教育政策研究所)                 |
| 「森信三 一日一語」                            | (平成 20 年 寺田一清 致知出版社)                |
| 「カリスマ教師の心づくり塾」                        | (平成 20 年 日本経済新聞出版社)                 |
| 「かたさを突破！学級集団づくりエクササイズ 中学校」            | (平成 25 年 河村茂雄・武蔵由佳 図書文化社)           |
| 「月刊生徒指導 6 月号」                         | (平成 26 年 学事出版)                      |
| 「平成 22 年度 宮崎市立本郷中学校研究紀要」              | (平成 23 年 宮崎市立本郷中学校)                 |
| 「平成 26 年度 研究員研修報告書」                   | (平成 26 年 宮崎県教育研修センター)               |

《研究実践校》宮崎市立本郷中学校